

「フィリピン研修派遣参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 (氏名)山淵あいり

本研修では、フィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission for Filipino Overseas: CFO)でのインターンをはじめ、その他政府機関や日本語学校、大学、NGOなどを訪問し、インタビューやディスカッションを行った。また、参加学生は各々の問題関心に基づいて、日本への結婚移民を対象とした5分程度の英語プレゼンテーションを作成し、計2回の発表を行った。

フィリピンは世界各国に労働力を送出国。かれらフィリピン人海外労働者(Overseas Filipino Workers: OFW)は稼いだ給料の多くを送金することで母国に残した家族の生活を、ひいては国家経済を支えている。国際結婚で海外に移住する結婚移民も多い。今回そういった移動を管理しているCFOや海外雇用庁を訪問し、OFWや結婚移民の保護やケアが非常に重要視されていることや、移住の審査や管理が高度に体系化されていることが分かった。一方で、かつて日本で就労したフィリピン人女性やその子どもであるJFCのエンパワメントに取り組むNGOでは、在比日本大使館の当該課題に対する問題意識の希薄化が明らかになった。日本で就労するJFC女性や日本語訓練学校職員からは、日本の外国人労働者受け入れに関する諸問題や新在留資格「特定技能」の課題について聞き取ることができた。日比間の人々の移動に関する、日本社会が忘れてはならない事、今後新たに取り組むべき事の両方への問題意識を深めることができた。

2017年に参加した初めてのフィリピン研修では、労働・結婚移民の実態に対してはもちろん、街中で目にするあらゆる事象に対して毎度かなりの衝撃や動揺を感じていた。2回目となる今回は、もう少し冷静な姿勢で参加することができたと思う。しかし日比国際結婚の有り様に対する依然として言語化しきれない感情が変わらず存在するし、ストリートチルドレンに触れられたときに自然と込上げてくる良くない感情に自己嫌悪感で苦しくなった。未だ消化しきれない程の多くの学びを得た充実感も感じている。こういった感情を、今後の研究へのモチベーションとして繋げていきたいと思う。

1週間で約15か所を訪問し、各々が10名以上に聞き取りを行った今回の研修は心身ともにハードなものであった。しかし、研修を終えた私達7名が共有しているのは疲労感というよりはむしろ、根深い社会問題に対して私たちはいったい何ができるだろうかという無力感や、これまで当然視していた「愛」や「結婚」の概念がいとも簡単に崩されたことへの焦燥感かもしれない。私達は研修期間中、各所で得た疑問についてその何倍もの時間をかけて思考し、時には夜遅くまで膝を突き合わせて話し合った。その時間も含め、研修期間の1週間すべてが充実していたと感じている。

貴重な学びの機会を与えてくれた本研修において、日程調整や引率をしてくださった安里先生をはじめ、国際交流推進室の職員の皆様やフィリピン諸機関の皆様には深く感謝いたします。特に安里先生には研究/研究者とは何かということ、現地の人々と接する先生の姿から学ばせていただきました。本当にありがとうございました。